

千々石ミゲル墓所推定地 第3次発掘調査 記者発表記録(その2)

大石一久氏（石造物研究者・大浦天主堂キリシタン博物館副館長）は、発掘の研究調査統括として出土した遺物および副葬品に対する現時点での学術的な評価について説明されました。



墓石の拓本を採取する大石一久氏

■大石 一久 氏

私が今から述べることに一言おことわりしておきたいのですが、学問・研究というのはおのの分野において専門性があるということです。私の専門は地上標識、つまり墓碑です。今回の発掘調査の対象は地下遺構であり、そのなかでも分野によって専門性が異なります。今回はそれぞれの分野において日本で第一人者にあたる先生方のコメントをいただいていますので、後ほど紹介します。

今回の発掘は今日で終わりますが、全体的には二点が指摘されると思います。まず第一点は墓壙の件です。地上から約1 m下に2段階に遺構を掘ったうえで石板を置き、その下に長持を木棺の代用として埋葬しているということから、長崎県を含めて地方においては大変丁寧な葬り方であると各先生方が仰っています。それだけ丁寧なつくりでしかも長持を用いているということが、どういう意味を持つのかは今後の調査で明らかにしていきたいと思います。とにかく墓壙自体非常に丁寧なつくり方であり、一般の庶民的なものでは全くないということが第一点です。

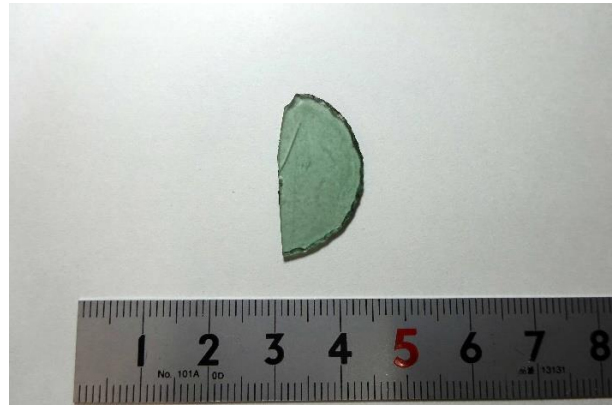
第二点が発掘された遺物の件です。最も強調すべきものは、副葬品として出てきた玉とガラスです〔写真1〕。そこで今野春樹先生（東京藝術大学大学院非常勤講師）と後藤晃一先生（大分県立埋蔵文化財セ

ンター)のお二人からコメントをいただいています。このお二人はキリシタン考古学のなかで遺物面をご専門とし、特にガラス玉についての研究では第一人者にあたる方です。ただしこれはあくまでも私がデータで送った画像上で判断されたところでのコメントです。お二人ともほぼ同じ内容でしたので、結論から申し上げます。

まず出土した玉ですが、おそらくキリシタン関係のロザリオの玉とか、そういうものに相当するキリシタン遺物であろうということです。実は同じような物が仏教関係の数珠にときどき出てくるそうです。しかしそれを打ち消したのがガラス破片です〔写真2〕。これが決定的でした。



〔写真1〕 出土した状況 (9月1日)



〔写真2〕 出土したガラス片

特にこれについて今野春樹先生から次のようなコメントをいただいております。「これはまず画像で見ても気泡がない大変精度がいいガラス板」ということです。この墓碑を含めて遺構そのものが17世紀前期に作られており、千々石清左衛門夫妻が亡くなったのは、妻が寛永9年12月12日で、本人が亡くなったのは同年同月の14日です。西暦に直すと1633年の1月19日に妻が亡くなり、本人は2日後の21日に亡くなっています。つまり17世紀前期の段階におけるガラス板について今野春樹先生によると「全く気泡がなく、これは鉛製のガラスではなくてアルカリガラスでほぼ間違いがないだろう」ということです。おそらくヨーロッパ製のもので、そこから持ち帰ったガラスであろうということです。

ちなみに千々石清左衛門として、最も特定できる手がかりは墓碑です。そこには「自性院妙信霊」さらには「本住院常安霊」と戒名が刻まれており、ここから類推するのが一番確かな方法です。そこから(埋葬者が)清左衛門であることはほぼ特定できると考えていますが、この遺物がミゲル(清左衛門)に関わるものであるかどうかは今後調査すべき点です。しかし少なくともこのガラスがおそらく当時のヨーロッパ製のものであることは間違いないと思われます。

これがどのように使われていたのかその用途については、聖遺物入れという小さな容器がありますが、〔参考資料を示しながら〕このガラスの蓋におそらく使われたものではないかということです。実は同じようなガラス板が大分県の丹生(にう)というところで壺の中から出てきています。その遺物は現在長崎の二十六聖人記念館にあります。そのなかに2枚のガラス板があり、それとほぼ同じです。ただ、むこうのもの(丹生出土のガラス板)は詳しい分析がありません。

それに対し今回出土のガラス板は、聖遺物入れに関係があり、しかも気泡がなく質がいいというところから見て、日本製ではなく、おそらくヨーロッパから運ばれてきたアルカリガラスであろうということが言えます。このことは今類推している千々石清左衛門の墓碑ということでも、非常に符合する点が

多い遺物であると考えられます。あとのことに関しては、骨の分析結果を含めて今後いろいろなことが出てきます。それをまた総合して今回の発掘調査に関わる最終的な結論を出したいと思います。

■立石氏

実行委員会として発掘のミッションは一応今日までですが、来週復元をおこない、正式な形で報告書を整えるまでが私たちの仕事です。可能な限り専門家に見てもらって分析をして、一番可能性の高いものに整理をおこない、最後は田中教授とか大石氏を含め他の先生方の監修を経て、報告書に整えて提出したいと思っています。

出土した遺物については風化（劣化）してしまうおそれもありますので、長崎県埋蔵文化財センターで保存処理をしてもらいます。それから骨や歯については分部哲秋先生（長崎医療技術専門学校学校長、長崎大学医学部客員研究員・解剖学）に鑑定をお願いしようと思っています。これらを総合するためには11月か12月、あるいは今年度いっぱいかかるかもしれませんが、そこまでは私たちのミッションとして全力でやり遂げたいと思っています。

また発掘の指導監督をおこなった田中教授からの「副葬品の取り合わせは仏教的ではなくキリシタンののだと思います。墓碑は仏教的ですから、全体としては潜伏キリシタンの埋葬状況だと思われます」というコメントが竹田氏より紹介されました。

■浅田 昌彦 氏（千々石ミゲル墓所発掘調査実行委員会顧問）

今回の発掘調査に関しましては、ここが周知の埋蔵文化財包蔵地という形で今年7月に登録され、発掘の届け出を自治体に出し正式なかたちで行っています。田中教授は今回の発掘調査における発掘責任者ですので、このコメントが現段階での今回の調査の正式（公式）な報告であるとうご理解いただきたいと思います。



調査開始後、周囲の土砂を取り除いた状態の墓所。領主級の非常に立派なつくりであることが明らかです。